追悼：生駒京子さん

生駒京子さんはかねてより療養中のところ2023年8月15日にご逝去されました。2009年より日本WHO協会理事として、2018年6月よりは副理事長として、協会の運営および活動にご尽力されました。

私自身、2018年6月に理事長を拝命したときから、副理事長をお願いし、困ったときにはいつも迅速、的確、簡明なアドバイスをいただきました。いままでにどれほど助けていただいたことか、感謝の念に堪えません。

生前のご厚誼を深く感謝し、ご冥福をお祈り申しあげます。

寄稿　中村安秀（公益社団法人日本WHO協会理事長）

デジタル母子手帳がつないだ縁

私が生駒京子さんといっしょに仕事した最初は、2009年に立ち上げた「デジタル母子手帳検討会」でした。母子保健情報の電子化や電子母子手帳など先行経験に関する情報交換を行い、デジタル母子手帳の開発に関する方向性を考え、アジアやアフリカにおけるデジタル母子手帳への期待に応えたいという思いでした。

当時、そういう夢物語に付き合っていただける方がほとんどいないなかで、「いっしょにやりましょう」と颯爽と登場されたのが、株式会社プロアシスト代表取締役の生駒京子さんでした。日本で最初に「WEB親子健康手帳すくすく」を開発し運用していた大久保賢介先生（当時香川大学医学部小児科助教授、現おおくぼ小児科院長）を囲む講演と意見交換会などを楽しく実施しました。

人並外れたセデンデビティ（serendipity）をもっていた生駒さん。意外な出来事と遭遇し、鋭い嗅覚と新しい事業の可能性を見抜くカンを働かせて、新しいものを発見することが本当に上手でした。

雪の遠野市での出会いと学び

2011年1月、当時、日本で唯一の行政が開発したデジタル母子手帳である「すこやか親子電子手帳」 を見学しようと、岩手県遠野市を訪問しました。遠野駅に降り立つとあたり一面が雪のなか（写真1）。

最初に、本田敏秋遠野市長を表敬訪問し、お話を伺いました（写真2）。当時の遠野市の人口は約3万人、年間の出産数は約200件。遠野市には産科の医師はおらず、小児科の医師は1人だけ。病院への通院は大変で、妊婦健診は峠を越えて1時間以上かかり、冬場は特に危険でした。「ないものねだり」ではなく、遠野にあるものを最大限に活用し、身の丈でできることをしないと長続きしないとのことでした。

遠野市健康福祉の里では、助産師がケアする「ねっと・ゆりかご」が開設され、モバイル胎児心拍数転送装置を活用して、県内の提携病院から医師の指導を受けることができるネットワークが構築されていました。それに加えて、香川大学での

経験を応用した形で、「すこやか親子電子手帳」が実施されていました。妊娠や

生駒京子（いこま　きょうこ）さん略歴

生駒さんは、技術者としてキャリアを積まれた後、専業主婦を経て一念発起して創業し、30年間にわたり株式会社プロアシストの代表取締役社長として、事業を発展させてこられました（写真5）。「創造すること、それが私たちのDNA」をモットーに、2016年には「大阪サクヤヒメ表彰」活躍賞を受賞され（写真6）、2021－22年度には関西経済同友会の代表幹事を務め、関西経済界における女性活躍の推進、女性経営者の育成などに意欲的に取り組まれてきました。

1956年　京都府京都市生まれ
1982年　大阪電気通信大学工学部卒業
1982年　日本コンピューター・サービス・センター（株）入社
1987年　株式会社コスモ・エイティ入社
1994年　有限会社プロアシスト設立　代表取締役就任
2001年　株式会社プロアシストに改組

「永久的不滅にて前進あるのみ。そして信頼と安心と安らぎを社会に与え続ける」という株式会社プロアシストの社是と軌を一にして、自社のビジネスだけでなく、社会への貢献に関しても積極的に前進されていました。生産技術振興協会理事、大阪産業局理事、大阪商工会議所一号議員、関西経済同友会代表幹事などの要職を歴任されました。また、大阪大学数理・データ科学教育センター招聘教授、大阪電気通信大学客員教授、大阪府国際交流財団評議員、在大阪カナダ名誉領事など、広く社会に貢献されました。

❶　大雪の遠野駅前。左から、生駒京子さん、中村安秀、大久保賢介医師、板東あけみさん（国際母子手帳委員会）、坂口香織さん（プロアシスト）（2011年1月）
❷　本田敏秋遠野市長（左から３人目）を表敬訪問。生駒さんは、右から３人目。（岩手県遠野市長室）（2011年1月）
❸　遠野市健康福祉の里で菊地幸枝助産師などから、オンラインを使った「すこやか親子電子手帳」の説明を受ける生駒京子さん。（2011年1月）
❹　世界保健デーのオンライン上の集合写真。上段の右から、山極壽一さん、生駒京子さん、中村安秀、渡辺知保さん。中段・下段は、関西グローバルヘルスの集い（KGH）のメンバー（2022年4月）❺　プロアシストの社員の集合写真。背景は台湾故宮博物館。（2018年）
❻　第1回大阪サクヤヒメ表彰にて活躍賞を受賞。表彰式の記念写真。生駒京子さんは前列右端。（2016年）

出産に関わる様々な情報、写真、保護者の思いなどを、複数の医療機関や家族が、瞬時に共有できるシステムでした（写真３）。父親が写真などをコンピュータ上にアップしたものを、他県に住む祖父母が見ることができるといった、デジタルならではの活用が行われていることが斬新でした。

その感動的な訪問から２か月後の、３月 11 日に東日本大震災が発生しました。遠野市は、地震や津波による被害に対する「後方支援拠点」として、被災した沿岸部を支援する防災訓練を震災前から行ってきました。しかし、東日本大震災のあまりに大きな被害のため、備蓄していた物資だけでは足りません。そのときに、いち早く遠野市に支援物資を届けたのが、プロアシストでした。外部からの震災支援では生駒さんが一番早かったと、遠野市の皆さんからいつも誉めていただきました。生駒さんの決断してから実行に移すスピード感と、軽快なフットワークの切れ味は爽快でした。

私たちの地球、私たちの健康

2022 年 4 月 7 日に開催された「世界保健デー」では、「Our Planet, Our Health」をテーマに共同座長をしました。山極壽一さん（総合地球環境学研究所・所長）と渡辺知保さん（長崎大学・学長特別補佐）とともに行ったオンラインのパネル・ディスカッションのすばらしい映像はいま日本 WHO 協会のホームページで見ることができます（写真 4）。

「パネルの間、ずっとワクワクしていました。きょうからきっと私たちは変わっていくと思います」という未来可能性を秘めた生駒さんの締めの言葉がいまも心に響きます。

デジタルに託す思い

『目で見る WHO』（2019 年冬号）の巻頭言では、創業時の思いに触れています。

「株式会社プロアシストは 1994 年に創業しました。当時の日本はバブル崩壊後で、ニュースや新聞記事がとても暗かったのを記憶しています。この日本を何とか元気づけたいという思いで起業しました。」

そして、「人生 100 年時代への突入に際して、技術の進化により医療の診断は変化していくことが予想されます。同時に、世界で健康に関する取り組みがどんどん広がっています」と日本 WHO 協会がめざすべき未来像に対してもエールを寄せていただきました。

人生 100 年時代にしてはあまりに早すぎる訃報に接し、大変残念な思いとともに、大きな喪失感のなかにいます。生駒さんの思いと夢を引き継ぎ、日本 WHO 協会として世界の健康に取り組んでいきたいと思います。